
マナとの約束

週末の騎士

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マナとの約束

【Nコード】

N5352M

【作者名】

週末の騎士

【あらすじ】

火竜竜雅は地元で有名な喧嘩屋で超能力者

彼は高校に入学し、微妙な超能力者たちと知り合っていく

そんなある日、自分が近いうちに死ぬことを告げられて……

プロローグ

あたり一面、白一色に覆われた夜
そんな銀世界の一部が赤く染まっていた

男に一人の少女が駆け寄る
手が赤く染まることも構わずに男を抱き寄せる

「竜……雅」

「泣くな……よ。ずっと前から、こうなる運命だったんだろ……？」

少女は声を押し殺して静かに泣いた
しんと雪が降り注ぐ中、二人の身体は冷たくなっていた

「ごめんな……約束半分しか守れなくて。でも……お前を守ることができた」

男は近くで倒れている『敵』を一瞥し、最後に少女の顔を見て目を閉じた

満足したような、悲しいような複雑な表情をしていた

「ああ……こんなの嫌。目を……覚ましてよ」

抱きかかえた男の顔や身体からは温もりが消えていった
少女はただ涙を流し、絶望した

ブログ（後書き）

一週間に一回以上必ず投稿します

1話 出会い

俺は火竜竜雅かりゅうりゅうが

ついさつき中学の卒業式が終わった
風に吹かれ満開の桜の花びらが散る
そんな桜並木の中、友達と共に帰宅中だ

「俺たちももうすぐ高校生か」

隣にいる男が憂いを帯びた表情で話しかけてきた
その顔やめてくれ

「あまり実感はないがな」

この腐れ縁とも同じ高校に入学が決まっている
普段勉強なんてやらなかったから受験勉強はきつかった
そんな苦痛から解放され自由を満喫していた

「まあ、毎日通っていたこの道とお別れと考えると少し寂しいかも
な」

「お前がそんなこと言うとか……なんか気持ち悪い」

俺は隣の失礼な男を軽く小突いた

「いだっ！暴力はやめてよ。竜雅の攻撃シヤレにならないんだから
さ」

こんな名前のおかげで小さい頃からたくさん喧嘩を売られてきた

で、いつの間にかかなり強くなり、今では喧嘩が日課になっている

「名前だけじゃなくてその怖い顔も原因だと思う」

人の心の中読むなよ

怖い顔じゃなくてワイルドな顔と言ってくれ

この陽気な男の名は神宮^{じんぐう}怜治^{れいじ}

ごつい名前とは裏腹に見た目、運動神経、学力、家庭全てにおいて平均的な逆に普通じゃない男だ
名前負けしてるにもほどがある

「どうせ俺は普通だよ……」

怜治がしょぼくれた

どうやら口に出ていたようだ

二人で会話しながら歩いていると人通りの少ない道に少女と大柄の男が揉めていた

うちの中学とは違うセーラー服を着てる

俺たちと同じく卒業式帰りのようだ

女に関して無頓着な俺でも、その少女の容姿に惹きつけられた

清水のようにさらさらと流れるセミロングの黒髪

大きめの綺麗な目はつり上がり、相手を威圧している

肌は桜が舞い散る中、より一層白さが際立つ

背は低めだが圧倒的存在感を放っていた

「アンタ、謝りなさいよ」

少女は透き通った天使のような綺麗な声を出した

「あ？そっちがぶつかってきたんだろ！……よく見るとかなりかわいいじゃねえかよ嬢ちゃん」

男はグヘへと笑う

うわあ、今時あんな絶滅危惧種が存在するなんて……助けに入るか、と考えた時

「あ……？」

男が少女に持ち上げられた
しかも片手で

軽く風を切る音がし、男は放り投げられた
派手な音を出して木にぶつかり、気絶した

怜治は口をポカンと開けアホ面になっていた
かくいう俺も啞然としている
あんな細い手で有り得ないレベルの怪力を見せられたのだ
当然の反応だろう

「あつ、そのアンタ」

少女が俺に声をかけてきた
我に振り返り返す

「なんだ？」

少女は凜々しい目で俺を見据えはつきりと告げた

「アンタ、今から一年以内に死ぬよ。99%ぐらいの確率で」
風が強く吹き、桜の花びらが、サアッと俺たちを取り巻く
それが俺と真奈との出会いだった

2話 超能力

初対面の少女に突然一年以内に死ぬって告げられた
聞き間違いかもしれないから問い返してみる

「すまん。意味がよく分からなかった。もう一回言ってくれ」

少女は髪を風になびかせめんどくさそうに口を開いた

「はあ。だからアンタ、一年以内に死ぬのよ。雪の降る夜に」

情報がひとつ加わったな

「君はなんでこの人の未来が分かるんだい？しかも初対面で」

怜治が呟く

そつえばいたなお前
存在を忘れてた

「信じないと思うけどあたしはエスパーなのよ。予知夢の」

「予知……ね。もしかしてさっきの怪力もか？」

「うん。……もしかしてあたしの話を信じてるの？」

少女が少し驚いた表情をした

「実は俺……怜治っていうんだけど、俺もこの男も超能力者なんだ。
それに君の怪力を見たらね」

「お互いビミョーだけどな。特にお前」

「ほっとけ」

怜治がムスツとする

あれだ、こいつはよく落ち込むみたいだ

「初対面っていうのは、アンタたちからしたらそうだけど、あたしは夢で会った……いや、見たかな？」

少女は曖昧な説明しか出来ない自分に不満そうな顔をした

「とりあえず自己紹介しようぜ。俺は火竜竜雅。んでこっちは神宮
怜治」

「まあなれ合う気はないけど社交辞令だしね。あたしは赤羽真奈^{あかばね まな}」

失礼なやつだな

言葉にも少し棘がある気がするし

「というわけで死なないよう1%にかけてみてね」

真奈は手を振り去っていった

死……ねえ

ぶっちゃけ超能力のことは信じる。怪力を見せられたわけだからな
ただ予知のほうは今すぐには証明のしようがない
なにより超能力を複数持つなんて相当珍しいことだと思う

「あの子、無茶苦茶かわいかったね。ただ死がどうかは気にしな

くてもいいと思うぜい」

怜治も同じことを思ったのだろう
それに対し、「ああ」と呟き道を曲がると数人の男たちが待ち構えていた

「君がドラゴンだね？」

その呼び名はあまり好きじゃないんだがな

「だったらどうした」

「ひとつ、手合わせ願おうと思ってね」

やっぱりそういう類の人間か
卒業式の時くらい自重できないんかね

さて、超能力の見せどころだな

3話 バランス

「かかってこいよ。群れないと喧嘩もできない屑ども」

俺の言葉に取り巻きたちは怒りを見せた
リーダー格の男が口を開く

「勘違いしないでくれ。あくまで俺と君のタイマンだ」

男が一気に距離を詰めてきて、右ストレートを繰り出した
ちなみに怜治は安全な場所に非難している

パンチを寸でところで避ける

「なかなか鋭い攻撃だな。何かやってんのか？」

「ああ。俺はボクシング部主将だ」

男はパンチのラッシュを繰り出す
それを受け流し、何度も避ける
避けるだけではちがアカないので、男めがけてキックをする

「ぐ……ガードの上からでこの威力か……」

両手でガードされたが、男は衝撃で後ずさった

「なら、これはどうかな？」

男はニヤリと笑い、手を挙げる

まるで何かの合図のように
すると - -

ブオン！

「！！！」

横から車が突っ込んできた
車体がこするように当たり、体が浮く

「があっ！」

倒れずに着地する

直撃はしなかったが腰を少し痛めた

「このっ、何がタイムンだ！」

「ヒヤハハ！勝てばいいんだよ勝てば！」

男が楽しそうに笑い、車がUターンした
車が入れない近くの公園に行くか……
痛む腰を抑え、駆ける

「逃げんのかあ？」

言わせておけば……

俺と男とその取り巻きが公園に入る

「出てこい！」

男が合図すると車の中から別の男たちが数人降りてきた
取り巻き含めてざっと10人

おいおい、マジかよ

「やれえ！」

チンピラどもが飛びかかってきた

パンチをしゃがんで避け、アッパーを繰り出す
チンピラは呻きをあげて宙に浮く

対角線上に二方向から蹴りが飛んでくる
それをバックして避けるとその二人は、勢い余ってお互いを蹴り
あつた

その時、腰が痛み俺は一瞬怯んだ
他の男から顔面にパンチをもらう
回し蹴りで弾き飛ばしたがまた別の男が……ああ！腰を痛めてな
けりゃこんなやつら……！

「おおお！！」

その後、何発か攻撃を受けたが雑魚どもを一掃した

「ハア……ハア、あとはお前一人だな」

「まさか10人全員倒すとは……。だが、すでにフラフラじゃねえ
か。これなら楽に勝てそうだな！」

俺はやつに蹴りを繰り出す

しかし、簡単に避けられカウンターを食らう

「おらぁ！さっきまでのスピードはどうした！」

男のラッシュを受ける

俺は無言でやつの顔面を殴った

「がっ！……倒れないどころか仰け反りもしねえだど？」

ようやく気づいたかマヌケめ。さっきからずっと……車に跳ねられたらときも俺は倒れなかった

「ハア、ハア。俺はものすごくバランスがいいんだ。だから衝撃で後ずさりはしても体勢は保てる」

「……その体格ではあり得ねえだろ」

「まあ、超能力だしな！」

あー、なんでこんなにビミョーな能力なんだろ

俺は痛む腰を無視し、男と殴り合った

威力は弱めだが何発も当てるうちにやつにダメージが
しかも、こっちは攻撃されても動じない

……いや、かなり痛いが

「がはっ……！いい加減倒れる！」

男が大きく振りかぶった

ボクシング部主将がそんなでかい隙を見せるとは

俺は思いつきり跳び蹴りをかました

「か……」

そのまま男は気絶した

「……思ってたよりタフだったよお前。あと、キャラ変わりすぎだ」

俺はその場で仰向けになった

3話 バランス（後書き）

どうも、作者です

バランス矯正って…主人公にしては微妙な能力ですね（^| ^ ;）

4話 再開

卑怯なボクシング部主将との喧嘩が終わり、別の公園へ移動したあの公園には気絶したチンピラどもがいるしな

「それにしてもあれだけ攻撃受けてよく動けるね」

「あの卑怯主将はともかく周りのやつらは雑魚だったからな。……車が当たった場所が一番いてえ」

腰を抑え、顔をしかめる
一応病院行くか

「とりあえず傷口を殺菌しようか？」

「ああ」

普通の男、神宮怜治は俺と同じく超能力者である
能力は……

「ほいつ。終わり」

触れた一定の範囲の悪い菌を『殺菌』する

「お前、本当に能力微妙だよな。存在がビミョーだと能力もビミョーになるんだな」

俺が可哀想なものを見る目をする

「ほつとけ！てかお前だつて微妙だろ」

「俺のは実践的だ」

「絶対主人公とかにはなれない能力だ」

今のは少しイラッときた

まあ実践的だっていつでも地の強さがないと意味ないが
それにお互い目に見えないし、表現しづらいからな……

その後、病氣に行き軽く手当てを受けた
腰の怪我也入学式までには完治するそうだから
ちなみに家に帰ったら親に散々に怒られた

部屋でくつろぎながら今日出会った女の子のことを考える
予知能力と怪力……2つ以上の能力を持つ人間もそりゃいるかもな

今までで出会った能力者は怜治と他に2人
世間で公になっていないことから能力者の数は相当少数だと思う
それとあの子、なにか得体の知れないものを抱えていたような……

春休みが終わり、入学式が来た
校門の前に着くと一人の絵に書いたような可憐な少女に声をかけ
られた

「あつ、一年以内に死んじゃう可哀想な人」

「長くて最悪なニックネームだな……。久しぶりだな、真奈」

まさか同じ学校だったとは

まあ……再開の台詞としちゃ最悪だが、また会えたのは悪い気分ではないな

これが俺と真奈を取り巻く悲劇の序章であつた

5話 入学式

入学式

中学の卒業式に会った真奈と再開した彼女との挨拶もそこにクラスへそこには怜治……そして真奈もいた

「あ、真奈ちゃん。君もこの学校だったんだ」

「まさかあなたたちとまた会うとはね……」

「3人と同じクラスか。腐れ縁だな」

俺と怜治は苦笑する。だが、真奈は無然としていた

「とりあえず、2人ともあたしには関わらないでね」

「え？」

「……」

真奈の凍るような言葉に俺と怜治は一瞬怯む

真奈はそのまま自分の席に座った

「真奈ちゃん……。なんか、感情を押し殺してる感じだね」

「ああ。せつかく再開したのに戸惑った感じだったな」

気になるが所詮能力者繋がりというだけの他人だ

今の俺たちにできることはない

先生が来てHRが始まった

そしてクラス内の自己紹介に

「赤羽真奈です。よろしくお願いします」

真奈の態度は憚然としていた

周りの男子から「かわいい……」「少し冷たいな」という声が聞こえた

「火竜竜雅だ。中学の時、部活は帰宅部。よろしく」

周りの男女が「目つき悪いね」「名前がまんまドラゴンだ」と囁く
ちなみにドラゴンという呼び名はあまり好きではない

「神宮怜治です。中学の時はパソコン部でした。一年間よろしくお願いします」

「見た目普通ね」「名前は凄いの」

周りの声に怜治が少し落ち込む

よく落ち込むやつだ。それに名前とのギャップは事実だしな

「山田太郎だ！みんな野球やろう！」

坊主で体格のいい男が元気よく自己紹介した

……あいつ、絶対キャッチャーだな

「吉川海音よしかわ かいねです。よろしくお願いします！」

明らかに日本人のものとは思えない金髪をポニーテールで結っていた

背は小柄だが胸は大きめ
多分ハーフだろう

真奈に引けを取らないくらい可愛らしい容姿をしている

印象に強く残ったのはこのくらいか
ちなみに1人欠席者がいるらしい
入学式初日から欠席とは

HRが終わり、放課後に
真奈に声をかけようとしたが無視された

「初めましてだな！火竜竜雅。中学の時の噂は聞いてるぜ。一緒に
野球やろう」

山田が声をかけてきた
俺のを知ってるのか

「竜雅のことを知ってるのか？」

「確かお前は神宮怜治だったか。……名前負けにもほどがあるな……」

「しょぼん」

怜治……

「ああ、悪かった悪かった。これからよろしくな！」

怜治は「まあ、慣れてるけどね」と言い山田と握手した
慣れてるならいちいち落ち込むなよ

「火竜よ。お前、中学の時、体力テストで全国5位だったろ」

ああ、納得。だから俺のこと知ってたのか
ちなみにこれは事実だ

一つのことを続けるのは性に合わないから部活はやってなかったが

「それと2人とも……『超能力者』だよな」

山田の言葉に俺たちは驚いた顔をした

ただの野球少年と思ってたが……こいつも超能力か

6話 廃屋にて

クラスメートの山田は超能力者だった

話があるとのことで俺たちは場所を移動した
あまり人に聞かせたくない話らしい

「で、なんでこんな廃屋なんだ」

場所は人気のない廃屋

すぐ外には港で、穏やかな波が漂う海とテトラポッドが見える

「ここ、数日前に撤去されたビルなんだがな。人はいないし、話を
するにはうってつけだ。水もまだ止まってないしな」

「ふうん。お前も俺と同じ超能力者らしいな」

ちなみに怜治は邪魔だとかで家に帰された

あいつ、またしょぼくれてたな

「ああ。ときにお前、あの学校にはどれくらい超能力者がいると思
う？」

「あ？俺、お前、怜治、真……なんでもない。これ以外にもいるの
か？」

「お前が言いかけたのは赤羽真奈のことだろう？」

こいつ、超能力者かどうか見分けられんのか？

「俺はお前さんたちより少々能力のレベルが高くてね。魔力……いや、超能力だから……なんだ？まあ、そういうのが分かるんだ」

「魔力でよくないか？正確に超能力って決まってるわけじゃねーし。魔法かもよ」

お互いネーミングが適当だなあ

まあ、気力やら超力やらよりはマシだろう

「めんどいからそれで。んで、俺には人が発してる魔力が微妙に分かる。どんな能力かは分からないが」

「そうか。それで？」

ふと、窓を見ると空は赤みを帯びていた
遠くに学校が見える

「さっきちらつと言ったがあの学校には他にも能力者がいる。そこそこの数のな」

「そんな偶然があるのか？」

「おそらく人為的に集まったのだらう。どうやったかは知らないがな」

一体何のために集められたんだ？

「んで先日、自称予知夢の少女から聞いたんだよ。近々何か大きな事件が学校内で起こると」

「それって……」

俺が眉を動かし呟くと山田は頷く

「赤羽だ。以前能力者に会ったのが珍しくて声をかけたんだ」

ふーん

まあ能力抜きにしても真奈はかなり人目を引く容姿をしてるからな

「それで、近々起こる『何か』に対して対策を練ろうと思ってな」

「俺に仲間になれと？」

「ああ。そのために……というか個人的な我が儘だが」

山田がにかつと笑う

「手合わせ願いたい」

……デジャヴだ。その台詞

7話 対超能力者？

「手合わせ願いたい」

山田が手と足を少し動かし、構えた

俺は一瞬呆気にとられたがすぐに臨戦態勢に入る

「いくぞ！」

山田が全速力で突っ込んできた

「ふんっ、わざわざ突撃してくるとはな！」

その速さだと直前で止められないだろう

俺は体を横にずらし、カウンター気味に蹴りを放つ

「おお！」

山田がズン！と響くぐらい強く床を踏む。突っ込む勢いを無理やり殺した

トップスピードからピタッと止まるとかどんな脚力だ……

俺の蹴りは空を切った

その隙にボディブローを食らった

双方ともに距離を取る

「ぐっ……お前、素人じゃないな」

「ああ。野球やる前にちょこつとな」

こいつの動きのキレや力から察するに、あの卑怯主将より強いだろうな

だが

「こっちの番だ」

俺が猛スピードで距離を詰める

「さっきの俺と同じ動き……？」

山田が後ずさり、拳を構える

絶妙なポジションだな。やはり喧嘩慣れしてる

チッ

やつの蹴りが俺の頭をかすめた

「なっ、消え……」

態勢を地面すれすれにし、足払いをかけた

山田の蹴りに対して屈まなければ直撃していただろう

直前で止まったり、横に避けても蹴りが小振りのため意味がなかっただろうな

「ぐっ」

相手の態勢が崩れた

腹にアッパー気味にパンチを打ち込む
片手でガードされたが衝撃でやつの体が後ろに飛ばされた
まあ、態勢崩れたし力を込めたからな
ガードされたことには驚いたが

「さすがドラゴン。ふざけた攻撃力だな」

山田が腕をさすり皮肉気に笑う

「ありがとうよ！」

お互いに間合いを詰め殴り合う

今まで戦ってきた中でもなかなか手強いな
俺は相手のパンチ、蹴りのほとんどを避けたりガードした
対して俺の攻撃は何発もやつの体に刺さる
程なくして山田が俺から大きく距離を取った

「ゼエ、ハア……噂の通り無茶苦茶な強さだ」

山田が肩で大きく息をするのに対し、俺は軽く息を整える

「ふう。……そろそろ本気を出せよ」

確かに俺が圧倒的に有利だ

ただし、それは超能力者じゃない山田との戦いにおいてだ

「そうだな、このままやつても勝てないだろうからな」

そして初の超能力者との戦いになった

8話 対超能力者？

多対一や簡易的な武器を持ったやつとなら何度も喧嘩してきた
今、超能力者との初対決となる

しかも山田は超能力を使わなくても十分な運動神経を持ち、喧嘩
慣れしている

「食らえ！」

山田が俺の方向に手をかざす
すると手から何かが出てきた

ビシャッ

「水……？」

目めがけて水が飛んできた
ホースの先端部を握ると勢いよく水が出るが、おそらくそれぐら
いの威力と量だろう
左腕で水を防ぐ

それと同時に山田の右拳が腹に直撃した
目潰しかよ……！

殴り合いながら山田は執拗に水を飛ばしてくる
全て目に向けて
水を払うという余計な動作のせいで隙を突かれ、いくつか攻撃を
受けた

だが、俺も能力者だ

いくら攻撃の衝撃を受けても体勢が崩れないため、攻撃を受けたあとすぐさま山田を殴りつける

「ゲホッ……ハア、まるで木を殴ってるみたいだ。いくら攻撃しても全く崩れない……超能力か」

「ああ、俺の力は『バランス矯正』だ。対してお前の能力は『水の放射』か。つか目潰ししか脳がねえのかお前」

山田は殴られたところをさすりながら話す
体格通り、相当タフだな

「量や威力はホース程度。直接的な攻撃力はあまりないのが欠点だ。……目潰し以外にも使用方法はある」

そう言うときまた、目に向けて水を放った

「このっ！」

山田が間合いに入ってきたので後ろに下がる

「転ける！」

足元に向け水を放ち、水たまりができた

「効かねえよ」

能力がなければ滑って転んだかもな
だが、滑っただけにとどまり、そのまま山田を殴り飛ばした

「がああっ！」

山田が体を床に打ちつけた

「ぐうつ。手を替えるか」

打ちつけた腕を押さえ、よろよると立ち上がる
そして、俺に背を向けて走り出した

「なっ、逃げんな！」

あの野郎、勝てそうにないからって逃げ出すとか

山田はトイレの中に入った

中を覗くと山田が洗面台の蛇口を4つ全部捻り、水が勢いよく出る

32

その水が4つとも俺めがけて向きを変えた
あきらかに重力に逆らっている

「冷っ……」

体中に水を浴びせられたじろぐ

山田がドロップキックをしかけてきた

体が浮き、壁に打ちつけられる

水は曲がり、山田の体をかいくぐり俺に向かう
水を浴び続けながら山田の猛攻を受ける

……一時撤退するか

「ちっ」

転がるようにその場から抜け出し、すぐ近くにあった玄関から外に出る

目の前から潮の香りがする。目と鼻の先に港がある

山田も屋内から出てきて、俺の下に駆けてくる

身構えたがすぐ横を通り過ぎ、少し進めば海に落ちる距離で山田は立ち止まった

海を背に向けてこちらに振り向く

「お前の能力……水を出すだけじゃないみてーだな」

「ああ。一定の範囲内にある水を操ることができる」

山田は不適に笑い手を後ろにかざす

「もちろん……後ろにある『水』もな」

「!」

後ろの海の水が持ち上がり、柱ができる

「おいおい、マジかよ……」

山田が後ろにかざした手を前に思い切り振りかぶる

その動きに呼応するかのように、幅5メートルはある水の柱が蛇みたいに俺めがけて突っ込んできた

「レベル2『水の操作』だ」

9話 対超能力者？

山田が手を前に振りかざす

その動きに呼応するかのように幅5メートルはある水の蛇が蠢く
俺めがけて真っ直ぐに突き進んできた

「おいおい……冗談だろ」

あんなものをまともに食らえばタダじゃすまない
全力で左に走り、避けようとする

水の蛇も俺の動きに合わせ軌道を曲げた

このままじゃ直撃する！

「ああああああ！」

俺は頭から思い切りダイブした
地面は平坦なコンクリートだがなりふり構ってられない
体が地面と擦れて痛みが走る
ギリギリ水の蛇を避けた

「なんとか避けれ……」

水の蛇が廃屋の壁にぶつかり、跳ね返る
大量の水が波となって襲ってきた

「がぼっ……」

体が浮き自由を奪われる
完全に隙が出来た
山田に攻撃される……！

「ハアハア……」

山田はその場から動いていなかった
手を膝につき、荒く呼吸をする

「こんなでかい隙を見せたのにノーリアクションか。どうやらかなり『力』を使っらしいな」

俺は立ち上がり山田に語りかける

山田は疲労した顔を無理やり笑みに変えた

「ああ……あと2、3回ぐらいしか使えん」

超能力は無限ではない

ゲームでよくある魔法と同じように『力』の限度が存在する
一度に多くの『力』を使うと体への負担がでてる

幸か不幸か俺の能力は地味だからあまり『力』を消費しない

「じゃあと2、3発避ければ自動的に俺の勝ちってこったな」

「そうだな……ただ、お前に勝つにはこの水の操作を使うしかない」

山田が両手を広げる

後ろの海から幅1メートルほどの水の柱が5本現れた

「水の鞭だ」

鞭のように水が襲いかかってくる

右から来た鞭を屈んで避ける

間髪入れずに上と左の2方向から同時に襲ってきた

それを右にジャンプして避ける

上から襲ってきた鞭が地面にぶつかり弾ける

バシヤッ！

「がはっ！」

さつき避けた鞭が方向を変え、俺に向かってきた

それに気づかずに一発食らった

頭に衝撃が走る

残り3本の鞭が一斉に向かってきた

「火は水に弱いつてな、ドラゴン！」

山田が何かを叫んでいるが頭がグラグラするのでよく聞こえない

そのまま全部の攻撃が直撃する

足、腰、肩に衝撃が加わった

「……………」

意識が飛びそうになったがなんとか持ちこたえる

もし、倒れていたら決着がついていただろう

「かにりボロボロに見えるが、倒れないのは能力のおかげか……だが、能力抜きにしてもタフだ」

「ゲホゲホッ、そういうお前も相当苦しそうだな」

咳き込みながら山田を睨みつける

山田は片膝を地面についていた

「安心しろ、次で最後だ。もう『力』がほとんど尽きかけてるしな」

海の水が山田の頭上に集まり、直径5メートルほどの球体ができ

足がふらふらする

あんなのを食らったら確実に負けるだろうな

「野球でいえば逆転がかかったクロスプレーってところだな」

「あ？」

そつえばこいつ、野球バカだったか

「俺がホームベースで水球がブロックするキャッチャー。お前がラッナーってところか」

「だったら俺がホームベースを踏んで終了だな」

「いや、お前をブロックして俺の勝ちだ！」

水球が迫ってくる

強がってみせたがこのままじゃ十中八九負けるだろう

この地味な能力でやつの派手な能力を打ち破る方法を模索する

「……一か八かだがこれしかないか」

苦い顔で呟き俺は走り出した

10話 対超能力者？

俺はふらふらする足を無理やり動かし、山田の下へ駆ける
お互いに体力が限界を迎えている

山田の姿を隠すように幅5メートルはある水球が向かってくる
今までのやつの攻撃からあの水球の動きを推測する

左右に避けても、方向を変えてホーミングしてくると思う

最初の水の柱と違って操作はしやすいはずだ

その分威力は劣るだろうがすでにボロボロの俺にはあの水球で十分だろう

水球と地面との距離はだいたい膝上ぐらい

滑り込めば避けられるだろうがそんなことをすれば水球はそのまま下に落ちてくるな

逆にやつにしゃがんだ（またはスライディング）ことを悟らせなければ水球は落ちてこない

……

普段は効率の問題でやらないが、これしかないか

「まっすぐ突っ込んでくるか……」

「そのしよばい水風船を食らっても平気と思ったまでだ！」

捨て台詞を吐いたとき、俺と水球の位置が重なった

（よし、当たった！膝も通常的位置だから屈んだわけでもないみたいだ）

山田が勝利を確信したが水球はそのまま竜雅の体を通り過ぎた
まるで竜雅の体の膝から上が消えたみたいだった

「なっ」

山田の目に映った竜雅はリンボーダンス、またはマトリックスの
ような体勢をしていた

体はほぼ地面と平行

水球で竜雅の体は隠れるので足を見ることでしか動きを確認でき
ない

山田はまんまと竜雅が立っているものと騙された

（なっ、全力で走りながら一瞬であんな体勢取れるのか！？水球の
方向転換を・・・）

「終わりだ！」

竜雅は上体を起こし、再び走る

水球は竜雅の背後にあるがこの距離だとギリギリ間に合わない
当たったと誤認したせいでそのまま水球の勢いを殺さず、直進さ
せてしまった

竜雅の拳が山田に刺さる

山田は『力』の使いすぎでそれを防ぐ体力は残っていなかった

「さすがだ。ドラ……ゴン」

地面に倒れた山田が苦笑混じりに呟き、気絶した
同時に水球も消えた

「はあ、はあ、あの体勢無駄に能力使うわ喧嘩で全然役に立たないわであまり使いたくなかったんだが……。それになんかカッコ悪いしな」

俺の能力、バランス矯正は今みたいな無理やりな体勢をすることができる

ただ能力をたくさん使い、普通の喧嘩だとあまり役に立たないのであまりやらないが

「あー、疲れた。能力者ってのはめんどうだな」

俺はその場でペタリと座りこんだ

海の向こうには沈みかけた夕日が見える

「……ふうん。そこそこやるじゃない」

遠くから赤羽真奈は2人の戦いを見ていた

「予知ではあいつが死ぬ時、近くにあたしがいた。あたしがあいつに近づかなければ、あいつが死ぬこともないかもね……」

真奈はぶつぶつと独り言を呟くと潮の香りがする港から静かに離れていった

11話 日常

喧嘩が終わり、数分後に気絶した山田が目を覚ました

「よお。俺の勝ちだな」

山田は殴られた頬をさすりながら苦笑する

「いてて……ああ。まさかここまでやるとは思わなかった」

海を見ると夕日がほとんど沈みかけてる
波は穏やかだ

「これなら即戦力になるな」

「よく分かんが要は向かってくるやつらをぶっ飛ばせばいいんだ
ろ？」

「多分な。まあ、おいおい分かることだ。とりあえずお互い仲良く
しようぜ！」

それから俺と山田は別れた
体中が痛んだが何とか家まで辿り着けた
それから夕飯を軽く食べて深い眠りについた

……あいつの水を操る力、レベル2とか言ってたな
今度聞いてみるか

翌日

体の節々が痛み、山田はこれ以上なんだろうなーなどと考えながら登校する

「よ！竜雅……ってどうしたん？喧嘩でそこまで傷つくのは珍しいね」

「ちょっと山田とな」

「え？昨日山田と喧嘩したの！？」

朝からうるさいやつだ。怜治のくせに鬱陶しいので適当に相槌を打つと前方に真奈が

「あれ、真奈ちゃんじゃない？」

「ああ……」

真奈がこっちに気づいたが、特に挨拶もなくスタスタ歩いていく

「不思議な子だよな。突然突っかかってきたと思ったら、それ以降ずっと無愛想だし」

なぜだか、そんな真奈の態度に対して苛立ちなどは起こらなかったその態度がなんというか……作り物みたい……だったからか？

教室に入ると山田が海音に話しかけていた

「おはよう！海音ちゃん！」

「おはようです。えーと……田中君！」

山田がショックを受けていた
海音に気があるようだ

「今日は5、6時間目に部活紹介らしいね」

「ぶっちゃけだりい」

机に手と顔を投げ出し、怜治の言うことに返答する

「私、演劇部の垣根先輩に憧れてるんです!」

「か、海音ちゃんは垣根とかいうやつが好きなのか……」

山田がしょぼくれた

「ねえ竜雅。普通に山田と話してるけど、昨日本当に喧嘩したの？」

「まあ……いろいろあつてな」

海音が頬を抑えキヤーキヤー言いながら垣根のことを話し出した

「垣根先輩はかつこよくて、背が高くて、頭が良くて、運動神経抜群で、優しくて、憧れなんです!」

目をキラキラさせてる海音は可愛らしい

この子もその垣根とかいうやつに負けず劣らず人気ありそうだな
ハーフで金髪でツインテの容姿はかなり人目を引く

真奈も海音同様に人目を引くがクールというか無愛想だからな……

せっかくだから放課後に話しかけてみるか

能力のことやこれからこの学校で起こる何かについて知りたいし
避けられるかもしれないが行動しないよりはマシだろ

12話 垣根 大輝

5、6時間目に体育館に移動し、新入生向けに部活紹介が行われた館内には集まった生徒たちでがやがやと賑わっている
携帯片手に暇そうにしてる者、数人で集まって談笑してる者
まだ入学して間もないので、一人で行動してる生徒も多い

俺は部活紹介が始まるまで怜治と適当に雑談した

「竜雅は何か部活入んの？運動好きだったよね」

「多分どこにも入らねーだろうな。特別入り込んでるスポーツがあるわけじゃねーし」

「もったいないよねえ本当。まあ俺も帰宅部かな」

俺は中学の時、スポーツテストで全国上位に入ってしまった
そのため、よくいろんな部活の助っ人をしていた
俺が昔の記憶を思い出していると山田が声をかけてきた

「なあなあ、火竜、神宮。一緒に野球やろうぜ野球！」

「えー、運動めんどい」

「じゃあ火竜だけでいいや。神宮はついでだしな」

「しょぼん」

怜治が頬を僅かにひきつらせ、複雑な表情をする

「俺もパスだ」

「つれないなあ。おっ、そろそろ始まりそうだな」

山田の言葉で俺たちは解散し、それぞれ席に座った生徒会役員が会を進行し、演劇部の番が来た舞台袖から部員が三名現れると……

「「垣根くん!!」」

女生徒たちから声が上がった
なるほど。確かにかなりのイケメンだ

「どうも。演劇部です」

垣根が爽やかな笑顔を見せながら部活紹介をしていく

「軽く演劇をします」

パチパチ

「アナタノコトガスキダカラ」

なんかなまってる！
韓国語っぽい！
しかも棒読みだ

「はい。私も好きです」

「け、け、けっこ、けこん、けこんしょ、け――――！！！！」

垣根がにわとりのような奇声をあげる

「垣根がまたショートした！」

「こ、これで紹介終わります！」

……なんだっただ？あいつ

もしかして演劇部のくせに演劇苦手とか……

こうして部活紹介は無事に（？）終わった

13話 演劇部

現在俺、真奈、怜治、山田、海音は演劇部にいる
部活紹介が終わった後いろいろあり、みんなで演劇部の見学に来ていた

「一緒に演劇部の見学行こうよ！真奈ちゃん」

「なんであたしが……」

真奈が困惑した顔をする

海音は入学してからちよくちよく真奈に話しかけていた

「海音ちゃんが行くんなら俺も行くかな！」

山田が地味に便乗した

海音の目当ては十中八九垣根だろう

……健気なやつ

「と、いうわけでお前らも強制参加だ！」

山田が俺と怜治の手を取ってきた
き、気持ち悪い……

「なんで俺が行かないといけねーんだ」

「お、俺は別に……」

俺は仏頂面になり、怜治は冷や汗を流す

「頼むよ！海音ちゃんが赤羽を引きずっていったから男俺一人なんだよ」

知るか

俺が手を振りほどこいて帰ることにした

「今度能力のこと教えてやつから。レベル2のこととか」

「本当に山田って超能力使えるんだ……。レベル2って？」

「……」

怜治の言葉を見せながら爽やかスマイルで向かった後ろから「待ってー」としよぼん怜治が追いかけてくる

こうして今に至る

「やあ。君たちは見学者かな？」

垣根が白い歯を見せながら爽やかスマイルで尋ねてきた

「そうです！私、垣根先輩のファンなんです！」

海音よ……

あの劇でファンはないだろう

「ははは。それはありがとう。今から軽く劇やるから見てってよ」

部内には垣根の他に二人いた
眼鏡をかけた真面目そうな男と目つり上がってるなんか怖い女
美人だけど近づき難い感じだ

「どうも。二年生の英間 永太。部長をやっている」

「え？Aさん？」

怜治が聞き返すとAさん……じゃなかった、英間さんはやや憤慨
した

「おい、一年坊。アルファベットのほう想像したろ。どっちも漢字
だ漢字」

どっちでもいいよそんなん

「私は二年生の織田 麻里。女王様とでも呼んで頂戴」

見た目通りすぎて逆に新鮮だよおい
つか、女王様って。そんなこと言う人初めて見たわ

「自己紹介も終わったし、劇を始めようか。簡易的なパンフだ」

垣根から手書きのパンフを渡される

桃姫物語 ー勇者丸男とジョニーの血戦ー

丸男……垣根 大輝

桃姫……英間 永太

ジョニー……織田 麻里

……なんか名前に配役違くない？

微妙な顔をしている俺に真奈が話しかけてきた

「あの垣根とかいう人。部活紹介の時に妙な劇をやってたよね」

「ああ。……まあ今から分かんたろ」

真奈は海音に半ば無理やり連れてこられ、終始黙っていた

「それにしてもお前が大人しく着いて来るとはな」

「別に……暇だっただけよ」

真奈がセミロングの黒髪を靡かせ、そっぽを向く

「ところでお前、山田に何か話したらしいな」

「そうね。会った瞬間に能力者だと気づかれてね。適当にこの学校に危機が迫ってることを話したのよ」

真奈は目を細めながら髪の手をいじる

「ふーん。一つ聞きたいんだが、あの怪力はどこから来るんだ？」

「ああ、あれね……。アンタも使えるよ」

「え？」

普通能力は一人一つまでのはずだ

真奈だけ何か特別な要素があると思ってたんだが……俺にも使える??

「始まったみたいね」

話を逸らされた

まあ、また後で聞くか

14話 大根役者

演劇 桃姫物語 く丸男とジヨニーの血戦くが始まった

桃姫「おい丸男！ジヨニーから逃げるぞ！」

桃姫男だったのか……

丸男「……結婚詐欺か！だが、俺はパチンコ玉だ！」

垣根の目がグルグル回ってる

桃姫「何一つ台詞合ってねえよこの大根役者！」

ジヨニー「おーほっほっほ。このワタクシから逃げれるとお思い？二人とも調教してあげますわ」

ジヨニーこええ

てかジヨニー女だったんだ

丸男「アナタノコトガパトラッシュ！」

桃姫「てめーの頭ん中はクラッシュだ！麻里も突っ込んでくれよ」

ジヨニー「アハハハ」

ジヨニー「……麻里さんが鞭らしき何かで桃姫……英真さんを叩きだした

ジヨニー「え！？なんで俺！？」

丸男「ラララストエスプレッソ！！」

垣根が噛みまくりながらどこからともなく取り出した大根を英真さんに投げつけた

……何本も

桃姫「いでで！なんだその大根！？ちよつ、麻里、それはシャレにならないから！」

「キヤー！垣根先輩素敵です！」

お前は垣根先輩なら何でもいいのか海音よ……

こうして麻里さんが「そろそろ兄を調教する時間だから」と帰宅した

大根と鞭で叩かれまくった英真さんはぐったりし、垣根は相変わらず爽やかだった

どうやら変てこな劇をやってる自覚がないらしい

俺たちは微妙な面もちのまま、それぞれ散開した
海音だけは喜んでいたが

その後

「よう垣根先輩」

「確か……火竜君だっけ。僕に何か用かな？」

俺は一人で垣根の下に訪れた

「あんた、自分の劇についてどう思う？」

本来の目的とは関係ないことを聞く

まあ、これも興味あるが

「僕は他のことはあまり出来ないけど劇だけは自信あるんだよね。
まあ、まだまだだけど」

……

重傷だなこいつ

「ふうん……。ところであんた、大根どうやって出した？」

「え？出してないよ？」

どうやら劇中の記憶は曖昧になるらしい

「じゃあそこにたくさん転がってる大根はなんだ」

「……あ」

今まで気付かなかったのか

「あんた超能力者だろ？俺もそうなんだ」

「……そうだね。この大根は超能力で出したものだよ」

やっぱりか

どうにも不自然だったからな

「このことはなるべく秘密にしてくれるかな？」

「ああ」

俺は今後何かあった時に都合がいいので垣根とアドレスを交換した
こうして完璧超人だが大根役者の垣根 大輝と知り合った

15話 惨劇

「アンタ、今日バナナの皮に気をつけたほうがいいよ」

演劇部の見学の翌日

教室に入るなり眠そうに欠伸をしてる真奈に話しかけられた
少しは心を開いたみたいだ

「バナナの皮……お前の予知夢ってやつか？」

「まあそんなところ。あ、アンタはその火竜に気をつけて」

ついでに予知された怜治がきよんとする

「竜雅が俺に危害を加えるのはいつものことだよ」

こいつ……

「まあ、気をつけてね」

真奈との会話も終わり、朝のHRが始まる

バナナの皮ねえ

漫画みたいに皮を踏んで滑って転ぶとか？

まさかそれはないだろう。能力が働いて転ぶことはない
それに多少の痛みには慣れてるしな

本当に真奈が予知を使えるか怪しいので軽く考えておくことにした

昼休み

真奈は渋々といった感じだが海音と雑談している
何だかんだで海音とは友達になったようだ

俺は――

「竜雅ー、一緒に購買行こうぜ」

「仕方ないな、特別に同伴してやるよ。光栄に思え」

「ははっ、こいつめ。照れおって」

怜治が気色悪い笑みを浮かべ、背中をバンバン叩いてくる

「だまれ」

とりあえず怜治に肘打ちを食らわせる

「ぐぼお。ひ、肘はまずいって……」

購買に着き俺は唐揚げ弁当を、怜治は焼きそばパンを買った

教室への帰り道の廊下を歩いていると、先のほうに壁に寄りかかりながらバナナを食べている男が

「……」

「おっ、真奈ちゃんの言ってたとおり、竜雅に天罰が下るフラグが。あれは二年生っぽいね」

服装は乱れており、髪はボサボサで長め

ワイルドな雰囲気をもった不良っぽい見た目だ

男はバナナを食べ終わると、廊下にポイ捨てした

「こら！東仙とうせん！またバナナのポイ捨てしたな！」

バナナの皮を捨てた東仙なる男に一人の女が声をあげた

腕には生徒会の腕章をつけている

背は標準ぐらいで髪はショート（怜治によるとボブカットだそう
だ）で、気が強そうな感じだ

おそらく二年生だろう

「うつせーなあ。風紀委員でもねえくせに。それとバナナじゃなく
てバナナの皮だ」

「そんなのどつちでもいいでしょ！こら、まて！逃げるな……
きやつ！」

東仙を追いかけてようとした女は、バナナの皮で滑って転け、尻餅
をついた

「いたた……もう許さないんだから！」

「ちょ、ちよつと落ち着け風見かざみ今のは転けたお前の」

「元はといえば東仙のせいでしょ！あ、こら、待ちなさい！」

東仙は逃げ出し、それを風見が追いかける

東仙はええな……

対する風見は遅かった。バナナの皮で転ぶようだし、外見によら

ず運動神経は鈍いのかもしれない

「……行くか」

「だね」

俺と怜治は歩き出す

バナナの皮を跨ぐとうすると

「おりゃ！」

怜治に押されバナナの皮を踏んだ

こいつ……悪ふざけしやがって

俺は転ぶことはなかった

が

滑った

転びはしないものの体が水平に移動する。バランスを保つといつても、慣性の法則を無視することはない……つまり衝撃を受けたりするとその分、体は移動する

しかも、怜治を殴るために体は怜治の方を向いていた

この……勢いと向き、高さでは……

「ちよつ、まつ、竜雅……か、顔がぶつか……」

世界が――揺らぐ

記憶に過去の思い出が流星のごとく流れていく

ああ、これが走馬灯か

そして

人生最……大の惨劇……は……起こっ……た……

「ぷつ、ぷぷぷ……。は、腹いてえ。お、お前ら最高だ」

放課後

山田が笑いを堪える

山田は俺と怜治の惨劇を見ていたようだ

「死にたいか？」

「ぷつ、ぷぷ……。い、いや、マジごめん。笑いすぎた」

「おえええ……。まさか、竜雅と口づ……。うつ、思い出したただけでおええ」

怜治はずっと自分の口を押さえ、“殺菌”をしている

おい、俺にもやってくれよ殺菌

石鹸で洗うだけじゃもの足りん

「おい、しょぼん野郎。俺にも殺菌……」

「ち、近づくなあ！この才ホモダチがあー!!」

「わはははは！あー腹いてえ！」

俺は二人を追いかけてようとしたが山田は腹を抱えながら、怜治はガタガタ震えながら逃げる

山田は笑いすぎて苦しいようでヨタヨタと凄く遅い
よし、怜治から処刑しよう

「二人とも、そんな関係だったんですね……」

海音が少し頬を染めている

ぐぐぐ……

「あたしの言ったとおりだったでしょ」

「ぐつ、できればハズれて欲しかったがな」

だが、これで真奈の予知もあながち間違っていないことが分かった
だったら、尚更あの怪力のことが気になる

体育の授業中、こいつはかなりの速度で走っていたりもした
聞いてみるとあれでもかなりスピードを落としてるらしい

「よし、怜治処刑完了。散々笑いやがって……次は貴様だあ!!」

「ぷつ……くつ、くんなよ……オホモダチキス魔君。俺には好きな
子がいるんだ……他の男子を当たってくれ……わははは!」

ぶちん

その後、山田に一発重いのを食らわした

「お気楽でいいねアンタたち……。一週間後、あたしとアンタは……」

16話 来訪者（前書き）

もうそろそろ一区切り……第一章が終わります

16話 来訪者

惨劇の翌日は土曜日で学校は休みだった

この日は家でマンガを読んだりゲームをしていた

その次の日は外に適当に買い物がてら散歩に

それからまた学校が始まる

山田に怜治とのことをからかわれたが次第にそれもなくなってきた
授業も本格的に始まり、俺や怜治、山田などの男子はよく居眠りをした

真奈はあれからあまり話しかけてこない

こつちから話しかけてもそっけない反応ばかりだ

能力のこととか聞きたいんだが……

能力といえば山田にも聞かないとな

それから数日後の木曜日

放課後校舎を出ると学校の門の前に突っ立っている男が
誰かを待っているのか？

「あ、なあ一年生の君。赤羽真奈って子いるかな？」

見た目は細身でメガネをかけていて、インテリ派といった感じだ
ただ、雰囲気や顔から体がある程度鍛えていて筋肉質だということ
とが分かった

「赤羽……知らないな」

とりあえず嘘をつくことにした

真奈は俺がここに来るよりずっと早く帰っていたから、この男とはすれ違いになったのだろう

「ふーん。そうか……。…………お前、嘘ついてるだろ」

「…………！？」

背筋がゾワツと寒くなった

凍てつく冬の強風よりも冷たく、鋭い

鳥肌が立ち、足が僅かに震え、冷や汗が流れる

なんだ…………こいつ。やばいぞ…………

俺は自然と拳を構え、鋭く男を睨む

「おつとつと、暴力はよしてくれ。俺は弱いし喧嘩が嫌いなんだ。痛いのは嫌だからな」

…………あの寒気が消えた

「あんた…………何もんだ」

「何もんつつわれてもね……。ただのしがない学生さ。この高校の生徒じゃないけどな」

こいつからは…………今まで喧嘩してきたやつらとは別格の何かを感じた

俺の本能が赤信号を鳴らしまくっている

「俺の名前は野間^{のまの}乃。下は軒^{のき}典だ。変な名前だろう？」

「……火竜。火竜竜雅だ」

「火竜……ああ噂の。へえー君があのだらゴンね。まあ君に用はないし、帰るとするかな。じゃあ」

男は微笑を浮かべ帰っていった

俺はしばらく突っ立っていた

体がようやく自由に動くようになった頃、日が暮れていた

「なんだったんだ……あいつ」

翌日

その『最強』は再び訪れた

17話 真奈と野間乃

翌日の金曜日の放課後

真奈が俺に話しかけてきた

「アンタ、今日商店街の方に行くといいことあるよ」

「どうしたんだ急に」

「別に……予知よ予知」

訝しむ俺に適当に挨拶をし、一人で帰っていった

「……」

「どしたん？竜雅。真奈ちゃんが一人で帰るのなんていつものことじゃん」

俺は怜治に「だな」と相槌を打つ

「じゃあ俺は野球部行くな！じゃあな、火竜、神宮」

「ああ」

「じゃあねー」

俺は真奈が気になり、密かに追っていた
やはり商店街とは逆方向に向っている。家の方向でもなさそうだ
辺りは静かで空き地が多い
真奈は廃工場に入っていた

（あいつ……なんでこんなところに……）

真奈の他に誰かいるようだ
あいつは昨日の男……！

「よう赤羽。やっと見つけた。俺と来てもらおうか」

「……アンタの目的は源玉だけよね」

「ああ。お前の同級生たちには手は出さないさ。東会も無駄な争いは避けたいからな。ただ、お前は死が確定するわけだが」

死？

真奈が？

「……ええ。アンタの組織を考えるとどのみち捕まるし、本当は五年前に死んでたし」

「利口だな。着いてこい」

俺は二人の前に姿を現した

「ちょっと待てよ」

「アンタ……やっぱり来たのね……」

やっぱり？

じゃあ商店街がどうかは俺を遠ざけるためだったのか？

「君は……ああ昨日の。で、何か用かい？」

「事情はよく分からねえがお前が真奈を連れ去って何かすんのはよく分かった。死とか不穏な言葉もあつたしな」

「だったら？」

野間乃が口元を釣り上げて笑う

「お前をぶつ潰して真奈を助けるだけだ」

「助けなんか必要ない……聞いているの！？」

俺は真奈の言葉を見殺し、やつの下に走った
昨日野間乃から凄まじく不吉なものを感じた
それに外に仲間がいるかもしれないから長期戦は不利そうだ

「こいつを倒した後に聞いてやるよ！」

野間乃との距離はあと10メートル
敵は余裕の笑みを浮かべ、拳を構えた
顔目掛けて突きを繰り出す

「ちっ……」

野間乃は顔を両手でガードした

「おおお！」

俺は野間乃の顔をガードしている両手をそのまま殴りつけた

「つつ」

野間乃の体が衝撃で後ろに下がる

俺はそのままラッシュをかけようと前へ出るが、向こうはカウンターの要領で蹴りを繰り出してきた

「当たんねえよ！」

蹴りを避け、逆にやつの体を蹴り飛ばす

腹に命中し、野間乃の体が九の字に曲がり後方へ飛んだ

背中から地面に倒れ込み、転がるようにして俺の追撃から逃れる

「ごほつ……痛え。やっぱり喧嘩は得意じゃないな」

野間乃は落ちた眼鏡を広い上げ掛け直す

俺は構わずに敵の懐に潜る

「調子に乗るのはここまでだ小僧」

「……かつ」

またあの寒気が

腕がやつの顔の前で止まる

いや、俺が自分で止めた……？

「体が動か……？」

バキッ

顔に拳が突き刺さり、後ろに後ずさる

能力がなければ倒れているほどの衝撃を受けた

「ちょっと遊ぼうと思ったけど、楽しい喧嘩の時間はこれで終わ
りだよ。ここからはただの処刑だ」

18話 処刑と抱擁

「お前の力を測ってみたが、喧嘩は強いみたいだな。だが……ここからは一方的な処刑の時間だ」

野間乃が不気味な笑みを浮かべこっちに向かってくる
俺は震える足を無理やり動かし、敵の体目掛けて回し蹴りを繰り返す

ゾッ

「……！」

「またしても俺の攻撃が寸前で止まった
いや、止めさせられた」

「どうしたあおい？攻撃しないのかい？」

野間乃の蹴りがみぞおちに突き刺さった
喉に胃酸がこみ上げてくるような気持ち悪い感覚に襲われ、軽く
咳き込む

「ゲホッ、ガハッ！らああああ！」

その場にしゃがみ、地面の砂利を一握り掴む
砂をかけて目潰しを繰り返そうしたが、またしても途中で拳が止
まった

手の隙間から砂がパラパラと零れる

「はははっ、もつと楽しませてくれよ」

屈んでる態勢の顔を蹴り上げられ、そのまま足を振り下ろされた地面に手をつき、頭や体を何度も踏みつけられる靴底や砂埃がひどい地面の嫌な感触を体中で感じた

「っ、この……」

俺は地面をがむしゃらで転がり、立ち上がる激痛が走るが、無理やり力を入れる

「おおあああああああ！」

腰にタツクルを食らわせようと全力で突っ込む
例え蹴られたり殴られても、能力の恩恵で仰け反らないので確実に成功するはずだ

そしてやつは物理的に俺の攻撃を止めているわけではない。何か細工をし、俺自信に止めさせてる
なら、直前で踏みとどまれない勢いを出せばいいはずだ

「獣みたいな声あげて必死だなあ。サービスだ。ちょっと出力を上げるかな」

「っっ」

凍てつくような寒気がした
鳥肌が総立ちするような吐き気がした
まるで自ら針のむしろに飛び込むような危険を感じた

鋭利で冷たく不気味で圧倒的な『殺気』

これがこいつの力の正体か

オーラ、存在感、気、威圧感……そのたぐいのものだろうか
敏感な人間や動物は本能的に殺気を捉え、攻撃を避けたり身の危険を回避する

それを強制的にやらされてるわけだ

俺のタツクルは左へ逸れる

針のむしろに自ら飛び込めるような人間などいない
赤ちゃんや心がない人なら別だろうが

「そらよ」

左ストレートを顔の側面に受ける

そして、また野間乃の一方的な処刑が始まった
攻撃を繰り出そうにも直前で止まり、逸れ、後ろに引つ込む
それどころか動きをコントロールされ自ら蹴りに体が突っ込んだ

この殺気は真奈にも届いているようで、震える自分の体を抱きしめている

小さな唇を噛みしめ、表情を歪ませている
目があうと複雑な顔で真奈は目を逸らした
真奈はこうなることがわかっていたのかもしれない
だからこそ、俺を遠ざけた
無駄な犠牲を出さないために

「……」

「かなりしぶといな。いい加減潰れる」

何発目か分からない蹴りを顔に受け、体が後方に浮いた
ダメージで脳が朦朧とし、能力が働かなかった
受け身もとらずに背中から落ち、激痛が体中に流れた

「ぐっ……があああああああー!!」

「そうかそうかまだ叫ぶ元気があるのか。それでこそ処刑のしがいがある」

体が悲鳴をあげる

大量の汗が流れ、血もいろんなところから出ている
呼吸も荒く、不規則だ

壁に手をつきながら再び立ち上がった

バランス矯正の能力で体が倒れないように支える

野間乃の下へ向かおうとした俺の肩に横から、細く白い綺麗な手が添えられた

「竜雅……もういいよ。逃げて」

真奈が体を震わせ、前から俺を抱きしめた

凄くいい香りがする

そして凄く柔らかい

艶やかなセミロングの髪、人形みたいに整えられた顔、おろした
ての制服が俺の血や土で汚れる

「……初めて名前呼んでくれたな。真奈」

俺がここまでして真奈を助ける理由

友達だから……出会って数日なのに？

そっけない態度をされてきたのに？

答えは……分かってる。いや、今分かった

こんな状況なのに真奈に抱きしめられ、嬉しい、幸せだ

俺は――

19話 対人戦最強

真奈は俺から離れ、野間乃の方向を向く

「もう、いいでしょ。竜雅を痛みつけるのは。あたしは……抵抗しないから」

「ああ。だが、こんなにも胸躍る狩りは久々だ。だから続行だ」

「えっ」

野間乃はニヤニヤと笑い、こっちに向かってきた

「真奈……俺はまだやれる」

「そんなボロボロの体で？無理よ。……無理やりにもアンタを逃がす」

「……あ？」

真奈が俺を背負った

小柄な体からは想像できない力で俺をおぶり、出口に向かって走る

「お、おい」

「黙って」

普通男女逆じゃないのか？

俺はいろんな意味で羞恥した

外に出て右に曲がった

そこで俺はなんとか降ろしてもらった

「あー、無茶苦茶カツコわりい……痛っ」

「アンタはこのまま逃げて。あいつはあたしがなんとかするから」

「一緒に逃げることは出来ないのか？見たところお前は能力を使つてあいつより速く走れそうだし」

野間乃の運動神経はせいぜい上の下ぐらいだろう

「神宮、山田、吉川、垣根その他の知り合いに別れを告げてあたしと一緒に逃げてくれるの？」

「……そんなの」

「他の人に手を出さない条件であたしはあいつの下に行くの。あたしが逃げたら」

「お前が死んじゃあ意味ないんだよ！」

俺は怒鳴った

一人が犠牲になるとか逃げれないとかふざけたこと言いやがって最初から諦めてたんじゃ全ての道が閉ざされてしまう

「一緒にあいつを倒そう。倒した後は……その時考える」

「でも……あいつは『対人戦最強』とまで言われてるやつよ?」

「対人戦最強……?」

「そう。強烈な殺気を操ってどんな人間に対しても一方的に勝つ。あの能力に逆らえる人間自体がこの世にいない。それにあいつの力は無尽蔵よ。しかもあの男を倒しても東会っていう」

「そんなのは倒した時に考えればいいだろ!」

俺の怒鳴り声に真奈が一瞬怯む

「じゃあ何か倒す手でもあるの!?」

「……」

真奈が初めて声を張り上げた

それほど事は深刻だった

確かに普通に向かったんじゃあ大勢で東になっても勝てないだろう

……だが、攻撃する方法がないこともない

さつき、少し実証したしな

「一つ、作戦があるんだ。あの男に一発でかいのを決める方法が。それには真奈……お前の協力がある」

「どんな方法?」

俺は真奈にある作戦を話した

「……確かに。もしかしたらいけるかも」

「やってくれるか？」

「どうせ逃げてくれないでしょアンタ。……だったら答えは一つしかないじゃない」

真奈は渋々といった表情で承諾した

「決まりだな」

「何が決まったんだ？おい」

さつき何度も苦しめてきた重圧が俺たちを再び襲った
廃屋から出てきたか

「お前を倒す算段さ」

「ははっ。どうせ逃げるかと思ってゆっくり廃屋から出てきたが一番愚かな選択を取るか。その女を見捨てればお前だけは助かったものを」

作戦……奇策は一回しか通用しない
さらに肉体、精神、能力全て限界がきている
チャンスは一度きりだ

俺と真奈は『対人戦最強』の男に立ち向かった

20話 クリティカルヒット

俺と真奈は野間乃と向き合った

「別に逃げてもよかったんだぜ？まあ、代わりに誰かが報いを受けるが」

野間乃はケラケラと笑う

真奈は俺の通学カバン握った

廃屋に入る前に俺がこの場所に放り投げていたものだ

「わざと逃げるチャンスを与えてやったのに。少なくとも火竜君にはな」

「お前……性格悪いなほんと」

女を見捨てて無様に逃げる俺を見て、愉悦しようとするやつだしな気まぐれというよりは自分の嗜好によって行動する自己満野郎だな

「お前ほとんどグロッキーなのにまだ向かうか。それに俺が力を使っただけからお前は一度も有効打を与えてないってのに」

確かに立っただけでいろんなところが軋み、鈍痛が襲う
視界も若干揺らぐし、呼吸もつらい

ただ、ここで引き下がれば真奈は二度と戻って来ない

「行くぞ真奈」

「うん」

配置は俺から見て右前方に野間乃、そのすぐ側にさっき戦っていた廃屋の入り口がある

俺は左側、真奈は右側に位置し、お互いの距離は若干開いている俺と真奈から野間乃まで距離はざっと10メートルぐらいか俺の真後ろにはガラクタが積み上がっている
先に真奈が野間乃の下へ駆けた

「掴みさえすれば……っ」

「無駄だ赤羽」

真奈の手が野間乃の顔前で止まる

真奈がお腹を蹴られ、軽い体が後ろへ転がる
止まったところで真奈は膝をついた

「うつっ……」

「これが作戦かあ？女をただ突っ込ませて自分は様子見ってか。最低だな。ははっ」

ああ、俺は最低で最悪だ。それは構わない
だが、これがあいつを唯一倒す最良の策だった
野間乃を潰した後で真奈に謝らないとな
真奈が野間乃に蹴られたのでその布陣は整った
俺と野間乃が真奈を挟むように一直線上に並んだ

「あ？何だ？逃げんのか？」

俺がいきなり後ろを向いたことで野間乃が訝しんだ

真後ろのガラクタにタタツと登る

足場も頭もぐらつくので能力は全開だ

俺はガラクタの足場を思い切り蹴り、野間乃目掛けて飛び蹴りをした

距離的にはギリギリ届くといったところか

「食らいやがれクソメガネ！」

さっきタツクルをしようとした時、俺に体を逸らさせることでそれを回避した

止まらないほどの勢いを出せばいいという線は間違っていないただ、さっきは足が地面に着いていたから失敗した
宙に浮かべば逸らすことすらできない

「なる。確かにこれだとお前を逸らせないな。なら――避けられればいいだけだろ」

野間乃は単純に後ろに移動した

この勢いでは確実に届かない場所まで
相手が止まらないなら自分が離れる……当たり前のことだ

「はははっ、潰れるドラゴン君」

俺は宙に浮かびながら野間乃の殺気を諸に受ける

……あと少しでもつてくれよ、俺の体

今まで膝をついていた真奈が唐突に立ち上がった
体の向きを横にし、俺の通学カバンを水平に両手で自分の胸の高さまで持ち上げる

「……ああ？」

俺はカバンに着地した

真奈は能力をフルに使い、カバンを支える

俺も最後の『力』を出しきり、バランスを整える

そして

「野間乃おおお！」

真奈がカバンを野間乃へ向けて思い切り振り回した

俺は真奈の力をプラスしてカバンを力強く蹴る

跳び蹴りとは打って変わって、ダイブするように野間乃の下へ飛び込んだ

真奈を大砲の中継地点として協力してもらった

自然に右拳を前へ突き出す

「ちっ、めんどくさいことを……だが」

今までで一番強い殺気が俺を襲った

俺の右拳は強制的に下げられた

「無駄だあ、お前の拳は届かな……」

ようやく気づいたか馬鹿め

この勢いは止まらない

そして、このままだと俺の額がお前の額へ直撃するだろうな

これが、針のむしろへ自分から突入する感覚か

ちよっとトラウマになりそうだ

「この、クソ……」

強烈な頭突きが敷地内に炸裂した

野間乃の体が吹き飛び、壁に背中を打ちつけ鈍い音を生み出した
ついでにやつの高そうな眼鏡が割れて地面を転がった

俺は能力を使い切ったためか、そのまま地面にヘッドスライディングを繰り出した

「いっ……てえ。最近、ヘッドスライディング多いな俺……」

最初で最後のクリティカルヒットは成功した

21話 決着

俺は血の流れる額を手で抑えながら膝立ちになった

少しなら体は動く

真奈はその場に座り込んでいた。至近距離で殺気を受けたからか、相当参ってるようだ

「あたしたち、野間乃を倒した……の？」

「ああ。ギリのギリギリでな」

「ぐ、っがあ！」

俺と真奈は目を見開いた

ぐったりとしていた野間乃が膝に手をつき、壁に寄り添いながら立ち上がるうとしていた

「無茶苦茶いてえ……。痛いのは嫌だつつんでんのに、このクソガキどもめ。本気を出してやるよ」

気づけば俺たちは後ろに下がっていた

ガタがきてる体を無理やり動かしたので、強烈な痛みにも態勢が崩れる

今までとは比べものにならないほどの嫌悪感が2人を襲った

近づかないと殺気の効果が薄まると思ったが違った

ただ、出力を大幅に抑えて手を抜いていただけだったらしい

最初から本気を出されていたら、そもそも攻撃をすること自体ができなかっただろう

「俺は東会のトップであり、最強の能力者だ。お前らみたいな」

野間乃は途中で力を失い、倒れた

同時に殺気も完全に消えた

相手が全く本気を出していなかったり、2人がかりだったか勝てた最強に

「恐ろしい男ね」

「ああ。とりあえずこいつの処遇を決めないと。どうしようか」

起きたら最大級にやっかいだ

仲間に連絡されるだけでなく本気で俺たちを潰しにかかるだろう

「手を抜いていたといえ、本当に野間乃を倒すとは。お前さんたちには驚かされた」

「誰だ、お前」

廃屋の裏から身長2メートルはありそうな恰幅のいい大男が現れた
かなり筋肉痛で顔もこつこつ

「わしは亀^{かめ}凧^{なぎ}。東会の一員じゃ」

「そいつの仲間か」

亀凧なる男を睨みつけた

きつと今の俺だと怜治にすら負けるな
だが、やるしかないか

「おっと、わしは別にお前さんたちと戦いにきたわけじゃない。このボスの勝手な行動を止めにきただけじゃ。こいつ以外は、ほぼみんな今は赤羽に手を出す気はない。人が死ぬのは誰も望まないからのう。しかし」

亀凧は野間乃を軽々と肩に担いだ
かなりの腕力だな

「いつかは源玉をもらいにくるから、その時は覚悟してくれ。わしらは別に次善団体じゃないからの」

亀凧はそのまま廃屋の裏に消えていった

「あたしたちなんて眼中にもないみたいね。今回勝てたのも奇跡に近いし」

「だが、結果的にはお前を守れた。それで十分だ」

真奈は笑顔で頷いた

「うん……ありがとう。ここを離れましょ」

「ああ……」

ここで記憶が途切れた
どうやら力尽きて気絶したらしい

今回は今までで一番疲れた
だが、一番意味のある戦いだった

好きな子を守れた。これ以上の喜びはない
一目惚れ……恋ってのはやっかいなものだな

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5352m/>

マナとの約束

2010年11月1日02時10分発行